

経済と経営 25-4 (1995. 3)

〈研究ノート〉

フランシス・ベイコンとピエトロオ・ヴェツルリイ
 ——「自然」と「生産技術」；「自然」と
 「労働」による「生産」——

鈴木秀勇

本・研究ノートは、拙稿・「『価値形成基体』と『労働時間』」の・後出・IV. 15) ——21) (本『経済と経営』・次号, 以降) のうち, 18), b), i), i), β) の論述に付される脚注・81) を, 別稿としたものである。

I.

1) a) ア) 上記・IV. 15) -21) の主題の一つは, i) K^2 が, それの『跋語』において, 「第二版で加えられた変更」のうち, 「本文自体にかかわって, もっとも重要なもの」とするところの〈第一〉に挙げられている作業, すなわち, (「第一章・一においては, 各々の交換価値が現われ出る等式の分析による・価値の導出が, 学問上いっそう厳格に遂行された」, と「呈示」している)¹⁾ その「価値の導出」が,

ii) 果たして, 「学問上いっそう厳格に遂行された」ものである, と言われうるか, 否か,

iii) 換言すれば, 「価値の導出」が, Paralogismus (論理誤謬) を犯しては

1) K^2 , „Nachwort.“ S. 813

〈いない〉, と認められうるか, 否か, —— の吟味であり,

イ) かつ, また, 犯して〈いる〉とすれば, 代わって採られるべき〈論理〉は, いかなるものであるか, —— の探索である。

b) そして, ア) この探索にあたって取り上げられるのが,

イ) i) 吟味の対象(K¹では, 「第一編」・「第一章。商品と貨幣。1)商品」の「第 27 パラグラフ」以下, 「第 29 パラグラフ」までの; K²では, 「第一編」・「第一節。商品と貨幣」・「第一章。商品」の「1) 商品の・二つの因子。…」のうち, 「価値の導出」の立論にあてられた・「第 7 パラグラフ」以下「第 10 パラグラフ」までと, 「2) 商品となって現われる労働の二重刻印」の「第 10 パラグラフ」, 「第 11 パラグラフ」との, 論述) の

ii) それぞれ直前におかれている (K¹では, 「第 26」, K²では, 「第 8」) パラグラフに付せられた脚注・13) (K¹, K²とも。) に挙示されている —— ピエトロオ・ヴェッルリイ (Verri, Pietro, 1728–1797) ・『政治経済学にかんする省察』中の^{1.a)}・ある論述である。

c) ア) K¹, K² は, 上記・パラグラフの冒頭で,

「使用価値財である上着, 麻生地, その他, 一言にして商品体は, 二つの要素の, すなわち, 自然素材と労働との, 結合体である」²⁾, と規定し, 一文

1・a) この著作については, cf. 本『経済と経営』・第 24 卷・第 4 号 (1994 年 3 月) 所収の拙稿・『ホブズの基礎諸概念の分析』, 脚注・39), 同上・号, 142–143 ページ

なお, “The Goldsmiths’ Library of Economic Literatur” (University of London Library) と, “The Kress Library of Business and Economics” (Harvard Library) との・各『蔵書目録』によれば, この著作の「初版」(1771 年)には, Napoli 版, Genova 版, Venezia 版, 刊行地・不明版の四種刊本があるが, いずれが「真正・初版」であるか, の調査結果は, ない。上記・刊本は, 上記・両 Library の合同・micro-film に, 収録されている。

2) K¹, S.9 ; K², S. 17

Die Gebrauchswerthe Rock, Leinwand u. s. w., kurz die Waarenkörper, sind Verbindungen von zwei Elementen, Naturstoff und Arbeit. (K¹による)

章を置いて、こう述べている。

「人間は、自らの行う生産にあたって、ただ、自然そのものが採るのと同じやり方を、採りうるに、すぎない。すなわち、ただ、*素材の態様を変貌させることができるに、すぎない*¹³⁾。いな、まだある。この・*変様させる*という労働そのものの中で、人間は、絶え間なく、自然諸力による支えを受けるのである」³⁾。

1) K¹, K²の・この規定は、ヴェッリの・下掲の論述の・しかし〈論理〉に、*全面にわたり、依拠しているものである*。

「この宇宙に生起してくる・あらゆるものは、それが、人間の手(*mano dell'uomo* [マアノオ・デッル・ウオモオ])による生産物 (*prodotti* [プロドットティ])であれ、ないしは、自然学の普遍法則による所産であれ、本来の意味での創造 (*creazione* [クレアチオーネエ])という観念を、与えるものではなく、もっぱら (*unicamente* [ウニカアメエンテエ]), 素材 (*materia* [マアテリィア])の態様変貌 (*una modificazione* [ウナ・モディフィカチオーネエ])という観念を、与えるものにすぎない。[素材を、] 合成スルコト (*Accostare* [アッコオスターレエ])と、分離スルコト (*separare* [セパアラレエ])とのみか、人間の知力が、生産 (*riproduzione* [リプロドゥチオーネエ])の観念を分析する時に見出す・ただ一つの要素である。[使用]価値ノ生産モ、富ノ生産モ、同じことである (*tanto è* [タントォ・エ])。なぜなら、人間の手によって (*colla mano dell'uomo* [コッラ・マアノオ・デッルウオモオ]), 昆虫 [／蚕]の吐く膠質がピロードに変換する (*si tra[n]smuti* [スイ・トラァ [ン] スムウティ]) 場

3) K¹, loc. cit. ; K², S. 18

Der Mensch kann in seiner Produktion nur verfahren, wie die Natur selbst, d. h. nur die Formen der Stoffe ändern¹³⁾. Noch mehr. In dieser Arbeit der Formung selbst wird er beständig unterstützt von Naturkräften. (K¹による)。

合と同じく (come se [コォメェ・セェ]), あるいは, 人間の手によって, 何個かの金属片が, 一個の懐中時計を形づくるように (formare [フォルマァーレェ]) 組み立てられる (si organizzino [スイ・オルガァニイッチイノォ]) 場合と同じく, 農耕地の土壌, 大気, 水分が, 小麦に変換するのである (si transmutino [スイ・トラァンスムウティノォ]) からである」⁴⁾。(括弧内・補

4) Verri : op. cit. (“Economisti Classici Italiani. Scrittori Classici Italiani di Economia Politica. Parte Moderna.” Tomo XV. Milano, 1804.) pp. 21–22

なお, 下掲・(c)の・1771年, Napoli版・「初版」の論述によれば, ここでは, —— K^1 , K^2 の著者が, 「重農論者たちに対する論争にあたって」, と言うように, ——「手工製造業者たち (manofattori [マァノォファットォーリイ]) の階級」を, 「不生産／不毛階級と見做す」 (hanno chiamata una classe sterile [ハァンノォ・キィアマァタァ・ウナァ・クラァッセェ・ステェリイレェ]) 論者に向かい, ヴェッルリイが, 「私は, かく見做すことは, 誤謬である, と信じている。なぜなら, この宇宙に生起してくる・あらゆるものは, …」, とし,

すなわち, 「誤謬」とする〈論拠〉を,

「手工製造業者」による・「ピロード」の「生産」の「場合と同じく」, 「農地耕作者」による・「小麦」の「生産」にあっても, 「生産物」・「[使用] 価値」すなわち「富」の「生産」が「与える」のは, 《いずれも》, 「労働」による・「素材」の「新たな態様変貌」 (una nuova modificazione della materia [ウナァ・ヌウオヴァ・モォディフィカァツィォーネェ・デェッルラァ・マァテェリイア]) という「観念」であることにおいて, 《ひとしい》, ——とする立論により, 「農地耕作者」 (agricoltori [アグリイコォルトォーリイ]) の「階級」のみが, 「生産階級」であるのでは, ない, ということに, おかんとしているのである。

この反論の〈手法〉として注目すべき点は, —— 「ピロード」および「懐中時計」を「生産」する「手工製造業者」を《原型》として, まず, 上掲の〈理論〉を立て, かくして立てられた〈理論〉を「農地耕作者」に及ぼすことにより, 「手工製造業者の階級」と, 「農地耕作者の階級」との間の・「生産」・「不生産」の差別を払拭する, —— ということにある。

(「初版」における・上記箇所の論述は, 後出・(c)のあとに, 訳出されている。

「初版」では, 「懐中時計」の事例の叙述がないほか, 用語上, いささかの相違があ

完は、引用者による)

d) ア) 上掲に言われる「人間の手」とは、(別稿・後出・IV., 18)に見るとおり)、「人間」の〈身体全器官〉がその「力」を「支出」する「労働」の意にほかならず、それゆえ、「人間の手によって」とは、もとより、「労働によって」を表示するものであるが、

イ) i) この箇所での・ヴェッリの論述の要点は、言うまでもなく、

ii) 「労働」による「生産」なる概念の「分析」が教えるのは、以下の事柄である、というところにある。すなわち、

ウ) i) 「労働」による「生産」とは、「労働」が、「素材」の「態様」(《在り方》)を「変貌」(／「変換」。以下、同じ)せしめることであり、

ii) そして、「素材」の「態様」の「変貌」とは、「労働」が、「素材」を、「合成」・「分離」することである。——

e) ア) だが、この時、 i) ヴェッリが、前掲の論述の初めで、「この宇宙に生起してくるあらゆるものは、それが、人間の手の生産物であれ、…もっぱら、素材の態様変貌という観念を、与えるにすぎない」と述べなが

る)。

下掲中、(a)は、K¹, K²の著者が閲読した・上記・刊本の〈原文〉、

(b)は、K¹, K²の・脚注・13)に〈印刷された文章〉であって、〈原文〉が《誤写》されたままに、K¹, K²が刊行されたことを、示しているもの、

そして、(c)は、前出・脚注・1・a)の“The Goldsmiths’ Library of Economic Literatur”および“The Kress Library of Business and Economics”所蔵の・四種の「初版」中、Napoli版——Verri, Pietro: “Meditazioni sulla Economia Politica. Prima edizione Napolitana.” Napoli, Nella stamperia di G. Gravir. 1771. 212 p. 20.5cm. (Micro-film)——の第10ページに印刷の該当叙述、

さらに、(d)は、MEW. Bd. 23. S. 57–58の・上掲・脚注のドイツ語訳の《誤謬》を示すもの、である。

(ただし、(a)–(d)は、長文にわたるため、本稿・本文の末尾に、脚注・4) (つづき)、として、記した)。

らも、

ii) つづいて、しかし、「素材を、合成スルコトと、分離スルコトとのみか、人間の知力が、生産の観念を分析する時に見出す・ただ一つの要素である」と規定していることの〈論理〉は、

イ) i) 「生産」の場合、「労働」が、《直接に》、「素材」の「態様」を「変貌」せしめるのでは、《なく》、

ii) 「労働」は、「素材」を「合成」・「分離」するに《とどまる》のであるけれども、

iii) しかし、 α) 「労働」によって「合成」・「分離」された「素材」が、 β) 己れの「態様」を、《自ら》、「変貌」せしめるのである、——ということである、としなければならない。

f) なぜなら。ア) まず、i) 「素材」とは、

α) K^1 , K^2 も、前掲のパラグラフで、「自然素材」という語を用いているとおり、

β) また、ヴェッセルリイの挙げる「昆虫 [／蚕] の吐く膠質」、「金属片」、「農耕地の土壤、大気、水分」、等に照らせば、この場合、〈物理上・化学上の諸特性をそなえた物質〉の意であり、

ii) 「人間」の〈外部〉にある「自然」界に属する「物体」(「自然物体」)のことに、ほかならず、

イ) したがって、また、「素材」の「態様」とは、かかる「自然物体」に〈自然から与えられている〉・《在り方》のことである。

ウ) それゆえ、ヴェッセルリイの・前掲の論述にあつて、‘come se’ (「…場合と同じ仕方で」と言われていることの意味は、つぎのところにある。すなわち、それは、——

i) α) 「昆虫」[／蚕] の吐く膠質」という「態様」における「自然物体」(「素材」) が、己れの「態様」を「ピロード」に「変貌」せしめるのは、(「変換する」を意味する ‘si transmuti’ は、もとより、再帰用法であるが、文字通

りに言えば、「自らを変換せしめる」意である)

β) 「手工製造業者」の「労働」が、「膠質」なる「自然物体」を、それが、自ら、己れの「態様」を「ピロード」に「変貌」せしめるような〈方法〉で、「合成」・「分離」する、——という・その「仕方」に、よるものであるから、

γ) その「場合」と「同じ仕方で」、という意であり、

ii) また、α) 数個の「金属片」という「態様」をまとっている「自然物体」が、自らの「態様」を「一個の懐中時計」に「変貌」させるのは、

β) 「手工製造業者」の「労働」が、この「自然物体」に、自らが「懐中時計」を「形づくるように、組み立て」ていくような〈方法〉で、「合成」・「分離」の操作を加える、——という・その「仕方」によるものであり、それゆえ、

γ) そうした「場合と同じ仕方で」、ということである。

iii) すなわち、α) 上の「場合と同じ仕方で」、

β) 「農耕地の土壌、大気、水分」という「態様」をとっている「自然物体」(「素材」)は、自ら、己れの「態様」を「小麦」に「変貌」させるのであって、

γ) 換言すれば、「農地耕作者」の「労働」は、これらの「自然物体」が、自ら、「小麦」という「態様」に「変貌」するような〈方法〉で、「自然物体」を「合成」・「分離」する、——という意味である。

g) そこで、ア) 「労働」による「生産」なるものを、あらためて規定すれば、

i) 「生産」とは、「労働」が、「自然物体」を、「合成」・「分離」し、

ii) そして、「労働」が「自然物体」を「合成」・「分離」する・その〈方法〉によって、(この時の〈方法〉が、「生産技術」である)

iii) 「自然物体」《自身》に、己れの「態様」の「変貌」を〈行わしめる〉こと、なのである。——

イ) こうして、 K^1 , K^2 が、i) 「人間は、自らの行う生産にあたって、ただ、自然が採るのと同じ・やり方を採りうるに、すぎない。すなわち、た

だ、素材の態様を変貌させることができるに、すぎない」と述べているのは、

ii) 上記のように、—— α) 「自然物体」が、《自ら》、己れの「態様」を「変貌」〈させる〉のであるけれども、

β) しかし、それは、「自然物体」自らに、かかる「変貌」を行なわしめるような〈方法〉で、「人間」が、「労働」を以って)「自然物体」を、「合成」・「分離」することによって、である、——との〈論理〉を、〈言表〉しているのであり、

iii) しかも、つづいて、

「いな、まだある。この・変貌させるという労働そのものの中で、人間は、絶え間なく、自然諸力による支えを受けるのである」と加えていることは、

iv) 本稿に上述した・ヴェッルリイの〈論理〉における・「自然物体」自らの《働き》を、よく分析しえたことを、示すものである。

2) a), ア) 上記・1), f), g) に見た・ヴェッルリイの論述における・「労働」による「生産」と「自然物体」との《関係》の〈論理〉は、

i) i) ヴェッルリイに先立つこと一世紀半、中世・「スクホオラア学」を却下した・近代「技術科学」(Sciēntia Operātīva [スキエンツィア・オペラァーティウァ])の創建者・フランシス・ベイコン(Bacon, Francis, 1561—1626)が、1612年頃に執筆し・死後・約三十年に刊行された著作・『精神球界記述』の「第二章」にあつて、

ii) 「生産技術」と「自然」との《関係》にかんして告げている・下掲の〈論理〉と、《同一》のものである。

すなわち、ベイコンは、その《関係》について、こう規定している。

「[技術と自然との関係について] 本来、人間の魂の中に深々と根を下ろしていてしかるべきであった識見は、技術の働きと、自然の働きとは、形相[法則]の上では、ないしは、本質の上では、相別れるものではなく、ひとり効果因の上で、相別れるにすぎない、という識見であり、すなわち、真実を言えば、人間は、自然[界]にたいしては、自然[物体]を運動させるこ

と[という効果]以外には、言い換えて、自然物体を、結合する、ないしは、分離すること (ut cōrpora … nātūrālia aut admōveat, aut āmōveat;) [という効果] 以外には、いかなる効果をも生み出す力 [／効果因] を、もってはいない、という識見であり、それ [／自然物体を、結合・分離すること] から先 [の効果] は、自然 [／法則／形相] が、自らの内部から、己れの力によって [／己れを効果因として]、それを成就していくのである (rēliqua nātūram íntus per sē trānsígere.)、という識見である」⁵⁾。

ウ) i) ベイコンにおける・「自然」と「生産技術」との《関係》についての〈論理〉と、ヴェッセルリにあっての・「自然物体」と「労働」による「生産」との《関係》にかんする〈論理〉との《同一》が、

ii) α) ヴェッセルリによる・ベイコンの〈論理〉の《摂取》に基づくものであるのか、

β) それとも、ヴェッセルリ《独自》の思索に発するものであるのか、

γ) ないしは、イターリアにおける・「生産」および「生産技術」にかかわる思想の歴史に負うものであるのかは、

δ) 本稿・筆者が、今後、探究すべき事柄に、属する。

iii) 今回の拙稿は、α) ベイコンの・前掲の〈論理〉が、どのような脈理の中で語られているかを、示すとともに、

β) ヴェッセルリにあっての・「労働」による・「素材」すなわち「自然物体」の行う「態様」の〈自己〉「変貌」の〈論理〉が、ベイコンにおける・ある〈特有〉な・「自然」概念に基づく〈論理〉と《同一》のものであることを、分析し、

γ) そこから、K¹、K²の前掲・パラグラフの規定の〈意味〉を、理解するものであるに、すぎない。

5) この文章が置かれた脈理と、原文とについては、cf. 本稿・次・II., 4), b) と、脚注・23)

II.

1) a) 1653 年に, I. Gruter の手によって出版された・ベイコンの著作に, 『精神球界記述』 (“Dēscrīptio Glōbī Intellectuâlis.”⁶⁾ ([デェースクリィーブツィオ・グロォビィー・インテェルレェクトゥアールィス]) が, ある。

ア) この「第一章」の章題は, 「人間ガソナエル学識ヲ, 心ノ・三様ノ能力, スナワチ, 記憶能力, 心像形成能力, 理性能力ニシタガイ, 総ジテ, 記録(História [ヒィストォリィア]), 詩作(Poësis [ポォエスィス]), 知ノ探究(Philosóphia [プヒィロォソォプヒィア]) ニ, 区分スルコト。オヨビ, コレト同ジ区分ハ, 神学上ノ学識ニアッテモ, 有効デアアルコト。ナゼナラ, 学識ノ内容ト流入口トハ, 上記ト異ナルニセヨ, 学識ノ容器(スナワチ, 人間ノ精神)ハ, 同一デアアルカラデアアル」⁷⁾, とされており,

イ) 「第一章」は, 冒頭で, 上記の章題を敷衍し,

「人間がそなえる学識の区別で・私が採用するのは, 人間の精神の・三様

6) 本稿での論述は, “The Works of Francis Bacon Faksimile — Neudruck der Ausgabe von Spedding, Ellis und Heath, London 1857—1874, in vierzehn Bänden”. Friedrich Frommann Verlag, Günther Holzboog. Stuttgart-Bad, Cannstatt, 1963 Bd. 3, 所収 (pp. 727—768) の・“Dēscrīptio” のテキストに, 拠っている。

なお, 上掲・“The Work” の編集者 (および, “The National Biography.” Vol. I. における ‘Bacon’ の項目・執筆者も, これに倣い), “Dēscrīptio” は, 「1653 年に, Gruter の手によって, 公刊された」としているのみであるが, それは, 下記の刊本に収録されて, ということである以外に, ない。(The British Library の蔵書目録に, よる)。

“Francisci Baconi … scripta in naturali et universali philosophia. [Edited by I. Gruterus.]” pp. 495. *Apud Ludovicum Elzevirium : Amstelodami*, 1653. 12°.

(『フランシス・ベイコンの……自然哲学および哲学全般にかんする著述。[I. Gruter 編集]。』495 pp. ローダウェイク・エルザウィール。アムステルダム, 1653 年, 12 折版。)

7) “The Works”, p. 727

の能力に対応する区分である」と述べ、「三様の能力」は、また、「三つの源泉」とも、言われる),

ウ) 「対応する区分」ないし(「第一章」・章題の「流入口」・「容器」の比喩に合わせて)「三つの流出体」とされるものは、もとより、「学識の・三つの区分」(「記録」・「詩作」・「知の探究」)のことであり、そして、

エ) 「記録は、記憶 (Memória [メモリア]) という・精神の能力にかかわり、詩作は、心像形成 (Phantasia [ファンタシア]) という・精神の能力に、知の探究は、理性 (Rátio [ラッティオ]) という・精神の能力に、かかわるものである⁸⁾、と示している。

b) ついで、ア) 「第二章」は、その章題を、「記録ヲ、自然ニツイテノ記録ト、社会ニツイテノ記録トニ区分スルコト。教会ニツイテノ記録ト文芸ニツイテノ記録トハ、社会ニツイテノ記録ニ包含サレルコト。自然ニツイテノ記録ヲ、類ニシタガウ自然ト、類カラ逸脱シタ [ノ異常ナ] 自然ニツイテノ記録ト、技術ニツイテノ記録トニ、区分スルコト。コノ区分ハ、自然ノ・三様ノ状態、スナワチ、自律の自然、欠陥ある自然、オヨビ、拘禁された自然トイウ・三様ノ状態ニ、基ツク」としており、(括弧内・補完は、引用者による。以下、同じ)

イ) そして、この「第二章」は、冒頭に、

「記録は、自然についてのものか、社会についてのものか、その・いずれかである。自然についての記録として記憶されるのは、自然の行いと営みとであり、社会についての記録として記憶されるのは、人間の行いと営みとである。疑う余地もなく、神の全能は、自然と人間との・いずれの行いと営みとにも、耀き出るが、しかし、人間の行いと営みとのほうに、より多く耀き出るものであり、それゆえ、神の全能は、記録のうちでも、とくに、私たちが聖界についての記録、ないしは、教会についての記録と呼び慣わしている

8) op. cit. pp. 727-728

種類の記録を、形づくることになる。こうして、神の全能が、人間の行いと営みとのほうに、より多く耀き出るところから、私は、教会についての記録を、社会についての記録の一部とすることにしている。しかしながら、まず最初に、自然についての記録について、述べることにしよう⁹⁾、と語ったのち、

2) a) ア) 「自然についての記録とはいえ、それは、個々の [自然] 物の記録では、ない¹⁰⁾が、

イ) しかし、そうでは「ない」ことは、「自然物相互間の境界が、紛わしく」、ために、「個々の自然物について記述することが、実は、不要であり、また、際限がなくなる」場合に限られるのであって、

ウ) しからずして、境界が明確であれば、「自然についての記録は、個物[の記述]を受け容れる¹¹⁾」のであり、

b) ア) 「境界」の「明確」な「個物」とは、「多数を成さぬもの」か、ないしは、「なんら類を成さぬもの¹²⁾」か、その・いずれかである、と規定し、

イ) これを例示して、「太陽、月、地球、これに類するものは、その様相にあって独自のもの [/ 多数を成さぬもの] であるから、こうした自然物についての記録が悉く描き尽されるのは、この上なく正当なこと¹³⁾」であるが、

ウ) しかし、「それに劣らず、自らの・本来の様相から著しく逸脱した異象 [/ なんら類を成さぬもの] についての記録もまた、正当なものである。なぜなら、かかる自然物の場合には、言うまでもなく、本来 [の類] の様相そのものの記述と認識とは、不可能であり、様相の記述と認識たるにたえないか

9) op. cit. ; pp. 728—729

10) op. cit. p. 729

11) op. cit. ; loc. cit.

12) op. cit. ; loc. cit.

13) op. cit. ; loc. cit.

らである」¹⁴⁾、と述べ、

c) そして、ア)上記をうけ、

「しかり。私が自然についての記録の区分の基礎に置かんとするのは、自然そのものの力、自然がおかれている状況であって、すなわち、自然は、三つの状態に身をおいているのが見出されるのであり、いわば、三つの・相異なる支配に服するものである。換言すれば、自然は、一つには、[自らの支配に服して] 自律のものであって、おのずから流れ出るもの、そして、定まった路を辿って拡がり行くものである。なぜなら、言うまでもなく、天体、動物、植物、および、自然の全構造に見られるとおり、自然それ自体は、自らの力によって動き、なにものにも、妨げられず、ないしは、拘束されないからである。二つには、自然は、逆に、[材質の支配に服して]材質から発する・反撥し反抗する歪みと不正常とにより、また、外部にある妨害物からの強力によって、自然の・本来の状態から、全く引き離され、突き離されてしまうものであって、これは、自然の異象と変異とに見られるとおりである。最後に、三つには、自然は、[技術の支配に服して]人間の技術、すなわち、人間から受ける作用により、拘禁をこうむり、変形し、根底から変化し、いわば面目を一新してしまうものであるのは、技術の働き [を受けている自然] に、見られるところである。…」¹⁵⁾

「…、しかり。技術の働きを受ける時、自然は、いわば、技術によって造り出されたもののよう、思われるのであり、すなわち、自然物体の様相は、一新されて現われ、[自然]物の世界は、あたかも別のものであるかのような様相を呈するのである」¹⁶⁾、とし、

イ) 結論を、「以上の理由から、自然についての記録は、自然のもつ自律ヲ、

14) op. cit. ; loc. cit.

15) op. cit. ; loc. cit.

16) op. cit. ; p. 730

ないしは、自然がこうむる欠陥ヲ、ないしは、自然が [技術から] 受ける束縛ヲ、扱うものとなる」¹⁷⁾、とするところに、また、「以上の理由から、自然についての記録は、類 [にしたがう自然] の記録、類からの逸脱 [の中にある自然] の記録、および、技術 [との関係の中にある自然] の記録、に区分されるが、私は、上記の・最後の記録を、生産技術の記録([História] Mēchânica [[ヒスト・オリ・ア・] メ・エ・ク・ハ・ニ・カ・ア]), および、自然 [／法則] の発見の記録 ([História] Experimentâlis [[ヒスト・オリ・ア・] エクス・ペ・リ・メ・ン・タ・ア・リ・ス])とも、呼び慣わしている」¹⁸⁾、とするところに、おくのである。――

3) しかしながら、a), ア) ベイコンの問題関心は、――いったんは、上掲のとおり、「技術」は、「自然」に「拘禁」・「束縛」を加えるものである、としながらも――、「自然」と「技術」とは、そもそも、《いかなる関係》にあるもの、と《把握されるべきか》、にあったのであって、

イ) そのことは、上掲の・「[…自然] に、見られるところである。…」の論述につづき、かつ、「以上の理由から」の結論を挟む・以下の立論に照らして、明らかである。

「技術が、自然に加えられる束縛である、との言を耳にするのは、ある人にとっては不愉快かも知れぬ。なぜなら、かかる人にとり、技術とは、自然を解放する者、救出する者に見做されるべきであるからであり、その理由は、技術が、自然の意図の・少からぬものを成就してくれ、外部からの妨害を阻止してくれる、というところにおかれるからである。しかし、あの言が不愉快に聞こえるにせよ、私としては、上記の類いの [技術にたいする] 追従・巧言には、いささかも耳をかすものではない。私が主張し、自らの見解とするのは、ただ一事、自然が、これまで、技術なきゆえになしとげられる

17) op. cit. ; loc. cit.

18) op. cit. pp. 729-730

ことのなかった事柄を、必ず、なしとげずにはおこなくなるのは、海神の従者・プロオーテウス¹⁹⁾に相当する技術によって、である、ということのみであって、技術が、暴力・束縛と呼ばれるか、支援者・育成者と呼ばれるかは、かかわりのないことである²⁰⁾。

b) この論述によってみると、ア) ベイコンは、「技術」を、「自然」にたいする「束縛」とも見ず、「育成者」とも見てはいなかったのであって、

イ) 知られるのは、ベイコンが「主張し、自らの見解とする」ところは、「ただ一事」——すなわち、大海神・ポオセイドオーオンが、海神・プロオーテウスを「従者」として七つの海を支配するのとひとしく、「自然」は、「技術」を「従者」とすることによって、「事柄」を「必ずなしとげずにはおかない」、という「一事」——であった、ということである。

c) しかし、この「一事」は、さらに、〈いかなる意味〉を有するものであったのか。

19) 'Prōteūs' / 'Πρωτεύς' ([プロオーテウス])。説話中の海神。ホメーロオスの『オデュッセイア』("Ὀδύσσεια.")・「第四編」・「第三百八十四行」-「第三百八十六行」にわたり、

「こなたに来たるは、過つことなき・海の
老人、
不死なる・エジプト人プロオーテウスにして、
こは、七つの海の
深みを知り尽くし、ポオセイダオン*)の
従者なり」、とある。

*) 通常は、アッティカ地域語の「語尾アクセント語形」・'Ποσειδῶν' ([ポオセイドオーオン])で知られる。「ポオセイダオン」('Ποσειδάων')は、「叙事詩形」。

「ポオセイドオーオン」は、大神・ゼウス (Ζεύς) に次ぐ神威をもつ海神。

("Ὀμηρος : "Ὀδύσσεια." Δ. 384-386. The Loeb Classical Library, I. Cambridge (Mass.), Harvard U-P. William Heinemann, Lond., 1984. p. 134)

20) op. cit. ; p. 730

ア) この間の消息をうかかうためには、まず、i) ベイコンが、「生産技術」の確立・発展と、そのための「技術科学」の、さらに、「技術科学」の成立要件たる「自然の解明」・すなわち〈自然認識〉・〈自然科学〉の・それぞれの進展を目指すところから、この進展に不可欠な《科学の方法》としての「帰納」に背反するがゆえに「斥けた」・いわゆる「スクホオラァ」学派（ベイコンの言う「弁証論者」）が、「自然」と「技術」との《関係》について、いかなる見解を、抱懐していたのか、

ii) これを、ベイコン自らが伝えるままに、聴かなくてはならない。

イ) 「弁証論者」の見解で、i) ベイコンによって「誤謬」とされるもの・〈二つ〉のうちの〈一つ〉は、「自然の働き」のみを〈認めて〉、「技術の働き」を〈認めない〉ものであって、それは、こう示されている。

「ところで、これまで、人は、技術についての記録を、好んで、自然についての記録を思い違えたもの、と決めつけてきた。これの理由は、古来から、技術とは、第二の自然にすぎず、したがって、技術の働きなどというものは、自然の働きとは全く馴染まないものとして、自然の働きの間から葬り去られるのでなくてはならない、とでも言わんばかりの論法・思い込みがつづいてきたところに、ある。そしてまた、この思い込みから生じた誤謬は、自然についての記録記述者の・ほとんどが、動物についての記録、ないしは、植物についての、あるいは、鉱物についての、記録を集大成すれば、それを以って能事終れりとし、生産技術に密着した・自然〔／法則〕の発見を顧みなかったことである。（この発見こそ、現在、知の探究にとり、まさに最大の推進力であるのに）」²¹⁾。

ii) 〈いま一つ〉の「誤謬」は、——「技術」を、「自然」の「付添人」であるとするにとどまり、「技術」が、「自然」にたいし、その「根元」・「最深部」において「変動」を加えるものとは、〈認めない〉見解であって、それ

21) op. cit. ; loc. cit.

は、こう言われている。

「加えてまた、人間の魂に流れ込んできたのは、いま一つの・さらにもっともらしい誤謬であった。それは、すなわち、技術は、たんに、自然の・いわば付添人と見做されるべきであり、換言して、技術の力とは、ただ、生まれ出た自然を育成する力、ないしは、成育すべき方向から逸れた自然を正しい道に引き戻すことができる力にとどまり、自然を根元から (rādīcitus [ラーディーキトゥス]) 変換させること (trānsmūtāre [トラーンスムウターアレ]) ができる力では、全くなく、ないしは、自然を最深部にあつて (in ímīs [イン・イーミース]) 変動せしめること (concútere [コオンクウテュレ]) ができる力では、全くない、とする誤謬である。かかる・技術の力の薄弱についての言は、人間の営みの中に、絶望の・最大なるものを、持ち込んできている」²²⁾。

4) さて、a) であるとすれば、ベイコンが〈認識〉するように、

ア) i) 「技術」が、「自然」を「根元」・「最深部」にあつて「変換」・「変動」せしめながら、

ii) しかし、「自然」にたいする「束縛」・「暴力」とはならず、「自然」の「従者」として、

iii) しかも、「自然」に、「事柄」を「必ずなしとげ」させる、—— という・

イ) 「技術」と「自然」との《関係》とは、いったい、《いかなる》ものであるか、—— である。

b) その《関係》が、本稿・前出・I. 2), a), イ), ii) のように示されているのである。

「かかる誤謬にひきかえて、本来、人間の魂の中に深々と根を下ろしていかざるべきであった識見は、技術の働き (artificiālia [アルティフィキアーリア]) と、自然の働き (nātūrālia [ナートゥーラーリア]) と

22) op. cit. ; loc. cit.

は、形相 (*fôrma* [フォーオルマ])。「法則」の上では、ないしは、本質 (*esséntia* [エッセエンツィア])の上では、相別れるものではなく、ひとり効果因 (*effíciēns* [エッフイキイエーンズ])の上で、相別れるにすぎない、という識見であり、すなわち、真実を言えば、人間は、自然 [界] にたいしては (*in nātûram* [イン・ナアートウーウラーム]), 自然 [物体] を運動させること (*môtus* [モオーオトウス]) [という効果] 以外には、言い換えて、自然物体 (*côrpora nātūrália* [コオルポォラァ・ナアートウーラァーリア]) を、結合する (*admóveat* [アドモオウエアト]), ないしは、分離する (*ãmóveat* [アーモオウエアト]) こと [という効果] 以外には、いかなる効果をも生み出す力 (*pótestās* [ポォテェスタァース]。「効果因」) を、もってはいない、という識見であり、それ [自然物体を、結合・分離すること] から先[の効果] (*réliqua* [レェリィクウァ])は、自然 (*nātûra* [ナアートウーウラァ]。[法則/形相]) が、自らの内部から (*íntus* [イントウス]), 己れの力によって (*per sē* [ペェル・セェー])。己れを効果因として、それを成就していく (*trānsígere* [トラァーンスイゲェレェ]) のである、という識見である」²³⁾。

ア) ベイコンは、「自然」 (*nātûra* [ナアートウーウラァ]) の語によって、
i) 一つには、「自然界」を、 ii) 二つには、「自然界」を形づくる「自然

23) op. cit. p. 730

At contra illud penitus animis hominum insidere debuerat, artificialia a naturalibus non forma aut essentia, sed efficiente tantum, differre ; homini vere in naturam plane nullius rei potestatem esse, præterquam motus : ut corpora scilicet naturalia aut admoveat, aut amoveat ; reliqua naturam intus per se transigere.

上掲で、'admóveat', 'ãmóveat' と、いずれも、「現在・接続法」形で現われている「動詞」は、「不定法」形では、前者が 'admovêre', 後者が 'ãmovêre' であり、「語幹」は、これも上掲中の「名詞」・'môtus' が由来する「動詞」の「不定法」形・'movêre' であって、それゆえ、'admovêre' の原意は、「…に密着するように、運動させる」であり、'ãmovêre' の原義は、「…から分離するように、運動させる」である。

物体」を、

iii) そして、三つには、以下に見るように、「自然物体」の「運行」・「運動」の「法則」（としての「形相」）を、表示したのである。すなわち、

イ) i) 主著・『[科学の] 大革新。第二部。新・論理学。自然の解明と [自然界にたいする] 人間の支配とについての諸命題』 (“*Instauratio Magna [Scientiarum]. Pars secunda Operis, quæ dicitur Novum Organum, sive Indicia Vera de Interpretatione Naturæ. Aphorismi de Interpretatione Naturæ et Regno [in Naturam] Hominis. Liber secundus Aphorismorum de Interpretatione Naturæ sive de Regno Hominis.*” London, 1620. Johannes Billius Typographus)²⁴⁾ の「第一編」・「命題。第五十一」は、下記の論述から成る。

「人間の精神は、その・固有の自然本性ゆえに、思考によって動きを停止せしめられたものに、魅せられ、すなわち、現実には流転しているものを、不動のもの、と思考してしまう。しかしながら、自然 [物体] とは、思考によってその動きを停止せしめるよりは、現実・に動いているままにそれを切開するのが、ふさわしいものなのである。デューモ・クリトウスの学派²⁵⁾

24) 上記の ‘*Indicia Vera …*’ と題される「第一編」は、“*The Works of Francis Bacon*” Bd. 1., pp. 147–223 に、“*Liber secundus …*” (「第二編」) は、Bd. 1., pp. 227–365 に、それぞれ所収。

25) ベイコンが「デューモ・クリトウスの学派」と言うのは、少なくとも、デューモ・クリトウス (*Δημόκριτος*, ? 460 B. C.–370 B. C.) の師と伝えられるレウキッポス (*Λεύκιππος*, ?–?) に始まる、と見られる・「原子」論の自然哲学を指すもの、と思われるが、次・脚注・26) の ‘*schēmātismī*’ (‘*σχηματισμοί*’), 26・a) の ‘*metaschēmātismī*’ (‘*μετασχηματισμοί*’) なる概念は、レウキッポスにも („*Die Fragmente der Vorsokratiker*, hrsg. von Hermann Diels. Hrsrg. von Walther Kranz.“ (3 Bde. Weidmann. 1974. Bd. 2 ; S. 70–81), また、デューモ・クリトウスにも (Bd. 2 ; S. 81–230), 見られないところからすれば、ベイコンの念頭にあるのは、エピクUROス (*Ἐπίκουρος*, 342/334 B. C.–271/270 B. C.) の「原子」論であるはずである。

がしたのは、その切開であり、であればこそ、この学派は、他の諸学派にまさって、自然 [界] の内奥に深々と入り込んだのである。[それゆえ、] まずもって綿密に吟味されるべきは、質料(mātéria [マーテ・ェリィア]。「物質」)であり、[物質を形づくる原子の]配列(schēmātismi²⁶⁾ [スクヘエーマァティスミィー])と、配列の変更(metāschēmātismi^{26a)} [メェタァースヘエーマァティスミィー])とであり、いな、むしろ、[原子の]ひたすらなる運行(âctus pûrus²⁷⁾ [アァクトゥス・プゥールゥス])であり、そして、この運行(âctus [アァクトゥース])ないし運動(môtûs [モォートゥース])の法則(lēx [レェクス])である。言うまでもなく、上記の・運行の法則を、形相(Fôrmæ [フォールマァエ])と呼ぶのは、人の自由であるが、それを別にすれば、形相とは、人間の魂が思い付いた捏造物である」²⁸⁾。

ii) 上掲の・「原子」の「運行」/「運動」の「法則」が、前掲の主著・別題に「自然の解明」と言われる時の「自然」の概念の内容であり、また、余りにも有名な「命題」——「ところで、事物にたいする・人間の支配は、ひとり、[生産]技術と[自然]科学とのみを、基盤とするものである。なぜなら、[生産技術による・]自然にたいする支配は、[自然科学により]自然に服従することを俟たずしては、行われぬからである」、(「第一編」・「命題」・第百

26) 本・脚注は、長文にわたるため、本稿・本文の末尾に、記した。

26・a) 本・脚注は、長文にわたるため、本稿・本文の末尾に、記した。

27) 本・脚注は、長文にわたるため、本稿・本文の末尾に、記した。

28) op. cit. pp. 168—169

LI.

Intellectus humanus fertur ad abstracta propter naturam propriam, atque ea quæ fluxa sunt fingit esse constantia. Melius autem est naturam secare, quam abstrahere ; id quod Democriti schola fecit, quæ magis penetravit in naturam quam reliquæ. Materia potius considerari debet, et ejus schematismi et meta-schematismi, atque actus purus, et lex actus sive motus ; Formæ enim commenta animi humani sunt, nisi libeat leges illas actus Formas appellare.

二十九) —— が宣言される場合の「自然」の意味である。というのは、

ウ) 主著・「第二編」・「命題・第二」は、その後半の論述で、上掲・「第一編」・「命題」・「第五十一」を受け、こう述べているからである。

「もとより、私は、前述箇所で、人間の心が、形相を本質の根源と見做すことによって犯した過ちを、指弾し、形相という名辞の用い方について、修正を加えたことを、忘れてはいない。しかし。自然界に (in nātūrā), 真に実在するものは、ひたすらなる・不断の運行 (āctūs pūrī indivīdūī [アークトウス・プーリー・インディウイドゥイー]) を、法則の力によって (ex lēge [エクス・レーエゲ]) 惹き起こす (ēdēntia [エーデエンツィア]) ・分割しえざる物体 (cōrpora indivīdua [コオルポオラア・インディウイドゥア])。 「原子」²⁹⁾ 以外に、なに一つ、ないにしても、しかし、学問の場合には、その法則そのもの (illa ipsa lēx [イッラア・イプサア・レークス]) と、法則の探究 (inquisītio [インクウィースィーツィオ]) と発見 (invēntio [インヴェンツィオ]) および開明 (explicātio [エクस्पリアカーツィオ]) とが、[自然にかんする] 知 (sciēndum [スキエンドゥム]) と [生産の] 技術 (operāndum [オペラエンドゥム]) との・いずれにとっても、基礎 (fundāmentum [ファンダメントゥム]) に当るものなのである。ところで、私が、形相という名称を耳にして理解するのは、上に記したものとしての法則と、法則の分節 (paragrāphī [パラグラフィア]) とである。それは、とりわけ、この名辞が、過去に大手を振って横行していたからであり、現在も馴れ馴れし気に近寄ってくるからである」³⁰⁾。

29) 本・脚注は、長文にわたるため、本稿・本文の末尾に、記した。

30) op. cit. ; p. 228

Neque tamen obliti sumus nos superius notasse et correxisse errorem mentis humanæ, in deferendo Formis primas essentiaē. Licet enim in natura nihil vere existat præter corpora individua edentia actus puros individuos ex lege ; in doctrinis tamen, illa ipsa lex, ejusque inquisitio et inventio atque explicatio, pro

エ) すなわち、「自然の解明」とは、上掲の・「運行」／「運動」の「法則」の「探究」と「発見」と「開明」とに、ほかならないのである。

c) そこで、この「自然の解明」の・《方法》上の手続きを、略記すれば。

ア) 「第二部」は、「命題・第十」以下にあって、

i) まず、α) 「自然 [／運動の法則] が、なにを、造り出し (fácit), ないしは、なにを、産み出す (férat) かは、捏造されてはならず、あるいは、案出されてはならず、発見されなければならない」³¹⁾, とし、

β) それのために、「まずもって準備されるべきは、充分にして・適切な・自然についての記録 (História Nātūrâlis), しかも、発見の記録 (História Experimentâlis) である」³²⁾, とするとおりに、

γ) 「例えば、熱の形相 [／前掲・自然物体・原子の運行／運動の法則] の探究にあたり、熱ノ自然本性ニ適合シタ発見事例」として、「太陽の光線」、「炎」、「加熱された固体」、等々、「二十八」にのぼるものを取り（「命題・第十一」）³³⁾,

δ) これらに即して「加熱」についての「発見」に努め、その内容を詳細に「記録」し（「命題・第十二」——「第十九」）³⁴⁾,

イ) i) その諸「記録」を、『[科学の] 大革新』全体の冒頭に付された・とくに「本書の配分」で提示される・「帰納」の《方法》によって処理した結論を、

ii) 「命題・第二十」に、「熱ノ形相ニツイテノ豊年収穫・第一」[*Vindemiatio*

fundamento est tam ad sciendum quam ad operandum. Eam autem legem, ejusque paragraphos, Formarum nomine intelligimus ; præsertim cum hoc vocabulum invaluerit et familiariter occurrat.

31) op. cit. ; p. 236

32) op. cit. ; loc. cit.

33) op. cit. ; pp. 236—238

34) op. cit. ; pp. 239—261

Prima de Formā Cālidī.) として収め、

iii) まず、予め、一もとより一、「熱の形相」と、「外部感覚内容」としての「熱さ」とは、「互いに別のものである」、と前置きしたのち、

ウ) i) 「分節 (Differēntia)・第一」を、——「熱とは、拡大運動であり、物体 (cōrpus。「物体」の「微粒子」/「極微の粒子」) が膨張しようとして力を尽す運動であって、すなわち、熱は、物体が、以前に占めていたよりも広汎な球圏ないし拡がりの中へ、伸展する運動である」³⁵⁾、——と示し、

ii) つぎに、「前・分節 [第一] への付加」とされる「分節・第二」の内容は、「熱という運動は、拡大運動であると同時に、上方への移行 [運動] である」³⁶⁾、とし、

iii) 「分節・第三」は、「熱とは、運動であるが、全体にわたり一様に拡大する運動ではなく、物体の微粒子 (particulae minōrēs) による拡大運動であり、しかも、同時に、[微粒子が] 抑止され・撥ね返され・撥ね飛ばされる運動であって、それゆえ、運動を、交替する運動、絶えず揺れ動き・相争い・突進し・そして、撥ね戻りから発する運動たらしめるものである。燃えさかる炎すなわち熱の烈しさは、このところから生ずる」³⁷⁾、と規定し、

35) op. cit. p. 262

36) op. cit. pp. 263–264

37) op. cit. p. 264

ここに言われる・「物体の微粒子」による「拡大運動」でもあり、「同時に、[微粒子が] 抑止され・…運動」, 「交替する運動・…」とは、——後出・エ) の・「熱の・真実の形相ないし定義」に、「拡大運動」は、「シカシ、循環へノ拡大ニヨッテ、イササカ、上方へ向カウ」、——と表現されていることと、かつまた、「分節・第三」の・つづくパラグラフでの記述——「最も顕著に現われるのは、炎の中と、沸騰する液体の中と、である。これらは、絶え間なく環流し (trépidant), 小範囲で盛り上がり、そして、また沈み込んでいく。」) ——とに照らせば、今日で言う「対流」運動を指すもの、と考えられる。

iv) 最終・「分節・第四」は、これまた、「前・分節・[第三] への付加」であって、「前記の・[微粒子の] 励起という運動、あるいは、透入という運動は、いささか迅速であって、緩慢とは言いがたく、また、極微の粒子 (particulae minūtae) によって惹き起こされるとはいえ、しかし、極微とはいうものの、極度の微細にまで立ち至るものではなく、いふなれば、やや大き目の微粒子 ([particulae] mājūsculae) である」³⁸⁾、とするものである。

エ) さて、このように、「熱」の「形相」/「運動の法則」を、四つの「分節」において把握したものが、統括され、

「ところで、上記の・豊年収穫・第一からすれば、熱の・真実の形相ないし定義 (definitio) は、以下のとおりである」として、下掲のように述べられるのであって、これが、「熱」の「自然」の「解明」である。すなわち、

「熱トハ、微小部分 (partēs minōrēs) ニヨル・拡大ノ運動デアリ、抑止サレタ運動デアリ、ソシテ、突進運動デアル。ところで、拡大について、付加が行われる。スナワチ、コノ運動ハ、シカシ、循環 (āmbitus) ヘノ拡大ニヨツテ、イササカ、上方ヘ向カウ。ところで、前記の・[微小] 部分による突進についても、付加が行われる。スナワチ、コノ突進ハ、全ク緩慢ナモノデハ、ナク、僅カナ衝動ヲ以ッテシテモ、発動スルモノデアル」³⁹⁾。——

d) 上記の手続きに見られるように、ア) 「熱」の「形相」、すなわち「熱」という「運動」の「法則」が、「帰納」の《方法》によって、「発見」され「開明」され、とりもなおさず、「熱」の「自然」が「解明」され、「法則」の「知」が得られた以上、

イ) 残るは、この「知」に《したがって》「技術」に到達することのみ、で

38) op. cit. p. 265

ここで、「やや大き目の微粒子」と言われるものは、いわゆる「分子」に相当するものであろう。

39) op. cit. p. 266

ある。

ウ) それゆえ、「命題・第二十」は、最後に、

「そこで、技術 (Operātīva) にかかわっては、事柄は、同一である」とし、

「君が、ナニラカノ自然物体ノ中ニ、上に「定義」された「運動」(「膨張ナイシ拡大へ向カウ運動、…」)を「発動サセルコトガデキルナラバ、疑イモナク、君ハ、熱ヲ産出スルコトニナル」⁴⁰⁾、とするのである。——

e) ところで。ア) このようにして、例えば、「熱」という「運動」を、「惹き起こす」(ēdere)のは、「自然物体」(「原子」, 「微粒子」, ないし、「分子」)であるにしても、

イ) 「微粒子」は、その「運動」を、「法則の力によって」, 「惹き起こす」のであるから、

ウ) i) <根源>において「運動」を「造り出す」(fācere)・「産み出す」(fēre)のは、

ii) 前掲・c), ア), i) のとおり、「法則」(「形相」)なのであり、

iii) それゆえ、——「法則」が、「運動」の「効果因」である、——としなければならない。

エ) ヴェッリが、「自然学の普遍法則による所産」と表現して、「解明」された「法則」を「効果因」としているのは、あるいは、ヴェッリがベイコンの中に見いだした把握であるのかも知れない。

オ) そして、i) にかかる「効果因」としての「法則」が、ベイコンにあっての・前記・b), ア), i) の・第三の意味での「自然」,

ii) 再言すれば、「[生産技術による・] 自然にたいする支配は、[自然科学により] 自然に服従することを俟たずしては、行われぬ…」とされる時の「自然」、——なのである。

40) op. cit. p. 265

カ) それゆえ、このところからすれば、

i) 前出・c), エ), オ), 再言して、—— さきに (「熱」として) 「定義」された「運動」を、「ナニラカノ自然物体ノ中ニ」「発動サセルコトガデキルナラバ、…熱ヲ産出スルコトニナル」——と言表される・「技術」の〈真実の意味〉は、

ii) α) 「実験の記録」からの「帰納」の《方法》によって「開明」・「解明」され、「知」が得られた・(「熱」という)「運動」の「法則」・「効果因」を、

β) 「自然物体」の中に「発動」せしめることが、

γ) その「法則の力によって」、(「熱」という)「運動」を「産出」する「技術」である、——というところに、あるのである。

f) だがしかし、指摘するまでもなく、ア) i) 「君ハ、熱ヲ産出スルコトニナル」と言われる時の「熱」とは、「膨張ナイシ拡大へ向カウ運動、…」〈以外のなにものでもない〉のであるから、

ii) 「君ガ、ナニラカノ自然物体ノ中ニ」、かかる「運動」を「発動サセルコトガデキルナラバ、…君ハ、熱ヲ産出スルコトニナル」、と言表することは、

iii) まぎれもなく〈同義反覆〉であり、

イ) この〈同義反覆〉は、「熱ヲ産出スルコト」すなわち「技術」が、〈成立しえぬ〉ことを、意味するものに、ほかならない。

ウ) そこで、i) α) 「技術」が〈成立しうる〉か、否か、がかかる唯一事は、

β) 「自然物体ノ中ニ」、《いかにして》、「法則」を「発動」せしめうるか、——であり、

γ) この《いかにして》こそが、求められている「技術」なのである。

ii) しかし、『新・論理学』は、前掲の・「第二編」・「命題・第二十」の論述を終了すると、以下の諸「命題」にあつては、主題を転換させて、上記・ウ) については、もはや、〈語らない〉のであり、

iii) 『新・論理学』の前身と見られる・1607年頃の執筆にかかる『思考と

意見。自然の解明について。別名，技術科学について (“Cōgitāta et Vīsa : Dē Interpretātiōne Nātūræ, sive Dē Sciēntiā Operātīva.”) (“The Works.” Vol. III. pp. 591–620) もまた，その間の消息を告げてはくれない。

エ) しかるに， i) 『精神球界記述』・「第二章」(1612年頃・執筆)は，
α) 『思考と意見』および『新・論理学』の構想とは〈無関係〉に，独自の「思考」により，

β) 『新・論理学』の「命題・第二十」の〈同義反覆〉を救う〈論理〉に想到した。

オ) すなわち，その〈論理〉とは，——

i) 「自然物体」を「結合」ないし「分離」する，という「効果」を生ぜしめる「効果因」が，「技術」であり，

ii) α) その「技術」，すなわち，「自然物体」の「結合」・「分離」が，
β) 「結合」ないし「分離」される〈以前〉に各「自然物体」の「運行」・「運動」の「法則」であったものに代えて，

γ) 〈新たな〉「法則」を「発動」させるのであって，

iii) そして，この・「発動」せしめられた「法則」が，〈新たに〉，（「自然物体」の「結合」・「分離」から先 [の効果] を，自らの内部から，己れの力によって，成就していく）のであり，「造り出」し・「産み出す」のであって，例えば，「熱」という「運動」を〈新たに〉「発動させる」のである。

iv) α) こうして，「自然物体」の「結合」・「分離」することに〈とどまる〉「技術」が，

β) まさにそのことによって，「法則」／「自然」を〈新たに〉「発動」せしめるがゆえに，

γ) 「結合」・「分離」から先 [の効果] を「成就」し〈えて〉，「技術」として〈成立〉するのである，——という〈論理〉である。

カ) ただしかし， i) ヴェッセルリの言う・「素材」（「膠質」；「金属片」；「土壌」，「大気」，「水分」）の「合成」・「分離」なるものは，理解しうるけれ

ども、

ii) ベイコンは、「自然物体」の「結合」・「分離」と言う時、それが、なにを表示しているかを、〈不明〉のままにしており、

iii) 『記述』の・次・「第三章」の論述は、—— Galileo Galilei が、前年・1611 年に公刊した『星界からの使者』（“Sȳdēreus Nūncius.”）—— の影響下に、「天空の記録」を内容とするものに推移してしまうのである。

g) とはいえ、ア) ベイコンの・上記の〈論理〉は、つぎの事例によって、理解されうるものとなる。——

i) 例えば、「原子核」という「自然物体」・「微粒子」は、

α) 「原子」の構造においては、「実体」を「合成」し・〈存立〉せしめる「運動」の「法則の力」のもとにあるが、

β) しかし、(ベイコンの言う)「生産技術(Mēchánica)」が、「原子核」を、「結合」(「融合」)し、ないしは、「分離」する(「分裂」せしめる)「効果因」であることにより、

γ) 「融合」・「分裂」という「効果」に基づいて「発動」せしめられた・〈新たな〉「法則」は、

δ) 「原子核」に、高度の「熱」という「運動」を「発動」させ、ないしは、他の諸「自然物体」にたいしても、巨大な・〈破壊〉の「運動」を「惹き起こ」さしめる。

イ) この場合、i) 「生産技術」は、原子核という「自然物体」の「融合」・「分裂」なる「効果」を生ぜしめる「効果因」に〈とどまる〉が、

ii) しかし、この「融合」・「分裂」は、「生産技術」が、〈新たな〉「法則」を「発動」せしめることに、ほかならず、

iii) この・〈新たに〉「発動」せしめられた「法則」が、〈新たな〉「効果因」として、高度の「熱」という「運動」なり、強烈な〈破壊〉「運動」なりを、「発動させ」、「造り出」し・「産み出す」のである。——

ウ) なればこそ、i) 「技術」は、一面では、「自然物体」を、「結合」・

「分離」する「こと [という効果] 以外には、いかなる効果をも生み出す力 [／効果因] を、もってはいない」にも拘らず、

ii) 他面では、その「結合」・「分離」が、

α) 「自然物体」の「運動」の「法則」としての「自然」を、

β) 「根元から変換させることができる力」であり、

γ) 「自然を最深部にあつて変動せしめる力」でありうるのであつて、

δ) 「人間の営みの中に」、《希望》を「持ち込む」ものである、——とされるのである。

エ) そして、この意味をこめて、『精神球界記述』は、つぎのように言うのである。

「以上の理由から、自然物体の結合ないし分離が、適切に行なわれれば、人間 (homo [ホオモ]) すなわち技術 (ars [アルス]) は、あらゆる効果 (omnia [オムニヤ]) を取めることができるのであり、しかし、適切に行われなければ、なに一つ効果を得ることができないのである」⁴¹⁾。

h) しかしながら、ア) i) 「技術」が、「あらゆる効果を取めることができる」のは、

ii) 「技術」から「先 [の効果] は、自然 [／法則] が、自らの内部から、己れの力 [／効果因] によって、それを成就していく」ことに、基づく以外の・なにものでも、ないのであつた。

イ) したがつて、i) 「技術」が《万能》であることは、「自然」(「運動」の「法則」) が《万能》であることと、《不可分離》の事柄であり、

ii) とりもなおさず、「技術」と「自然」(「法則」) とは、《二者にして・即・一》であつて、「本質の上では、相別れるものではなく、

iii) 言い換えれば、「効果」の生じたのが、「技術」にくよる、と云うのは、「自然」(「法則」) にくよる、と云うに、《等しく》、

41) op. cit. p. 730

ウ) つまりは、 i) いずれに〈よる〉とも、《分別しがたい》のであり、
ii) 〈言いうるのは〉、ただ、「効果」が生じた、という《一事のみ》である、ということである。

エ) それゆえ、上掲につづいて、ベイコンは、こう語っている。

「逆に言えば。上記の〔自然〕物体の・適切な結合ないし分離が行なわれて、定められたとおりに、なにかの効果に達しさえすれば、効果に達するのが、人間すなわち技術の力によるものであるのか、それとも、自然〔／法則〕の力によるものであって人間〔／技術〕の力は無用であるのかは、問うところではないのである」⁴²⁾。——

オ) i) 再言すれば、——「自然の働き」と「技術の働き」とが、「形相〔／「運動」の「法則」〕の上では、相別れることは、ない」、——という「識見」こそ、

ii) 「〔自然〕物体の・適切な結合ないし分離が行なわれて、定められたとおりに、なにかの効果に達」しうる・「科学」と「技術」との《相即》に、「人間」を導くものなのである。

i) 以上に見たとおり、ア) ヴェッセルリィが、——「労働」による「生産」の「観念」の中にあるのは、

i) 「労働」が、「素材」・「自然物体」を「合成」・「分離」することによって、

ii) 「素材」・「自然物体」に、〈自ら〉、己れの「様態」を「変貌」せしめることである、——と規定するさいの〈論理〉は、

イ) ベイコンにあって、「自然物体」の「運動」の「法則」としての「自然」と「生産技術」との《関係》が語られる時の〈論理〉の中に、見出されるのであり、

ウ) さらに、 K^1 , K^2 が、「人間は、自らの行う生産にあたって、ただ、自

42) op. cit. loc. cit.

然そのものが採るのと同じやり方を、採りうるに、すぎない。すなわち、ただ、素材の態様を変貌させることができるに、すぎない。いな、まだある。この・変様させるという労働そのものの中で、人間は、絶え間なく、自然諸力による支えを受けるのである」、と告げることの〈意味〉もまた、ベイコンの〈論理〉によって、理解されうるのである。(本稿・おわり)

4) (つづき)。 (a) [p. 21] “Tutti i fenomeni dell’universo, sieno essi prodotti dalla mano dell’uomo, ovvero dalle universali leggi della fisica, non ci danno idea di attuale *creazione*, ma unicamente di una *modificazione* della materia. *Accostare* e *separare* sono gli unici elementi che l’ingegno umano ritrova analizzando l’idea della *riproduzione*; e tanto è *riproduzione di valore e di ricchezza* se la terra, l’aria e l’acqua ne’ campi si transmutino in grano, come se colla mano [p. 22] dell’uomo il glutine di un insetto si trasmuti [*sic*] in velluto, ovvero alcuni pezzetti di metallo si organizzino a formare una ripetizione.” (pp. 21–22)

(b) 13) „Tutti i fenomeni dell’ universo, sieno essi prodotti della mano dell’ uomo, ovvero delle universali leggi della fisica, non ci danno idea di attuale creazione, ma unicamente di una modificazione della materia. Accostare e separare sono gli unici elementi che l’ingegno umano ritrova analizzando l’idea della riproduzione; e tanto e riproduzione di valore (Gebrauehswerth, obgleich Verri hier in seiner Polemik gegen die Physiokraten selbst nicht recht weiss, von welcher Sorte Werth er spricht) e di ricchezze se la terra, l’aria e l’acqua ne campi si transmutino in grano, come se colla mano dell’ uomo il glutine di un insetto si trasmuti in velluto, ovvero alcuni pezzetti di metallo si organizzino a formare una ripetizione“. (Pietro Verri : „Meditazioni sulla Economia Politica“ (zuerst gedruckt 1773) in der Ausgabe der italienischen Oekonomen von Custodi, Parte Moderna, t. XV p. 22.)

上掲・(b)に見える・例えば‘prodotti della mano dell’ uomo’の‘della’は、‘di+la’であり、「前置詞」・‘di’は、‘la’ (「定冠詞」)のあとにくる「女性名詞」・‘mano’ (「人間の」 「手」) 「の」, を表示し、これにたいし、前掲・(a) と、後出・(c) とに用いられている‘prodotti dalla mano dell’ uomo’の‘dalla’は、‘da+la’であり、「前置詞」・‘da’は、「人間の」 「手」 「によって」, を表示する。

(c) “..., poiche tutti i fenomeni dell’ universo, sieno essi prodotti dalla mano

dell' uomo, o dalle universali leggi della fisica, non ci danno idea d' una attuale creazione, ma bensì d'una nuova modificazione della materia. *Accostare*, e *separare* sono i due soli elementi, che l'ingegno umano ritrova, analizzando l'idea della riproduzione ; e tanto è riproduzione di valore e di ricchezza, se la terra, l'aria, e l'acqua ne'campi si trasmutino [*sīc*] in grano, come se il glutine d'un insetto colla mano dell' uomo si trasmuti [*sīc*] in velluto." (p. 10)

「[…，そして，手工製造業者の階級を，不生産階級と見做している。私は，かく見做すことは，誤謬である，と信じている。なぜなら，] この宇宙に生起してくる・あらゆるものは，それが，人間の手による生産物であれ，ないしは，自然学の普遍法則による所産であれ，本来の意味での創造という観念を与えるものではなく，与えるのは，素材の・新たな態様変貌という観念であるからである。[素材を，] 合成スルコトと，分離スルコトとが，人間の知力が生産の観念を分析する時に見出す・ただ二つの要素である。[使用]価値の生産も，富の生産も，同じことである。なぜなら，人間の手によって，昆虫 [蚕] の吐く膠質がピロードに変換する場合と同じく，農耕地の土壤，大気，水分が，小麦に変換するのであるからである」。

(前掲・(a) との・叙述上の相違点については，別記しない)。

(d) MEW. における訳文。

¹³ „Alle Erscheinungen des Weltalls, seien sie hervorgerufen von der Hand des Menschen oder durch die allgemeinen Gesetze der Physik, sind nicht tatsächliche Neuschöpfungen, sondern lediglich eine Umformung des Stoffes. Zusammensetzen und Trennen sind die einzigen Elemente, die der menschliche Geist immer wieder bei der Analyse der Vorstellung der Reproduktion findet ; und ebenso verhält es sich mit der Reproduktion des Wertes“ (Gebrauchswert, obgleich Verri hier in seiner Polemik gegen die Physiokraten selbst nicht recht weiß, von welcher Sorte Wert er spricht) „und des Reichthums, wenn Erde, Luft und Wasser auf den Feldern sich in Korn verwandeln, oder auch wenn sich durch die Hand des Menschen die Abscheidung eines Insekts in Seide verwandelt, oder einige Metallteilchen sich anordnen, um eine Repetieruhr zu bilden.“ (Pietro Verri, „Meditazioni sulla Economia Politica“ —zuerst gedruckt 1771— in der Ausgabe der italienischen Ökonomen von Custodi, Parte Moderna, t. XV, p. 21, 22.)

ア) ‘fenomeni’ を „Erscheinung“ (「現出様相」, 「現象」, 「幻像」, 「外觀」) と解するのは，《誤謬》。

理由。 i) α) „seien sie hervorgerufen“ と訳されている (ここは, „seien sie die Produkten“ であるべき)・この文章での „sie“ すなわち ‘fenomeni’ は, ‘prodotti’ (「生産物」, 「所産」) と, 《同義》であって, 「現象」ではないから, であり,

β) さらに, 「創造という観念を, 与えるものでは, 決してない」, と言われているのは, —— ‘fenomeni’ が, 「生産物」ではあるが, しかし, <被造物> では, ない, —— ということ, 意味しているから, である。

ii) ‘fenomeni’ なる「名詞」は, 「古典ラテン語」以来の ‘phaenónēna (pl. ; sg. ‘-non’)」に由来し, ‘phaenónēnon’ は, 「古代ギリシャ語」以来の ‘φαινόμενον’ に源をもつが, さらに, この語が発する・「動詞」・(‘φαίνειν’ (「光に当てる」, 「現われしめる」) の「受動相」形) ‘φαίνεσθαι’ は, 「光の中に出る」, 「現われる」, 「(しかじかに) 見える」, 等の語義とともに, 「存在するに, 至る」の意も, もったのであって, そのところからすれば, ‘fenomeni’ は, 「この宇宙に生起してくるもの」を, 表示している, と見るべく, そして, であればこそ, 「創造という観念」なる表現が用いられている, とすべきであるから, である。

イ) „sind nicht“ は, 《完全な誤訳》。

„geben nicht die Vorstellung von“ であるべき。

ウ) ‘attuale’ は, „tatsächliche“ と訳されるべきではない。「事実としての／真実の創造」なる表現は, <無意味>。

エ) „sind nicht …, …, sondern … lediglich eine Umformung“ も, 《完全な誤訳》。
„geben nicht …, sondern geben allein die Vorstellung von der Umformung.“ であるべき。

オ) „immer wieder“ は, 《不要》。

カ) „Reproduktion“ (二箇所) は, „Produktion“ であるべき。

キ) ‘tanto è’ は, 「古典ラテン語」に見える ‘tantum est’ に由来するから, „ebenso gleicher Art ist die Produktion“ で, 《足りる》。

ク) ‘se la terra, …’ を, „wenn Erde, …“ と訳するのは, 《不正確》。

この ‘se’ は, 「古典ラテン語」にあつて, 《根拠》を示す ‘si’ に由来する「接続詞」であるから, „wenn“ を用いるよりも, „weil Erde, …“ と <明確> に表示すべきである。

ケ) „oder auch wenn sich …“ は, 《完全な誤訳》。

‘come se’ は, — 「現代フランス語」の ‘comme si’ とともに, —— 「古典ラテン語」の ‘[tam …] quam si ~’ に発する「接続詞」であり, それゆえ, (「…の場合と同じ仕方」) „gleich als wenn …“ と言表されるべきである。

コ) 'il glutine' (「膠質」) は, 「ピロード」の「素材」を示しており, また, 'un insetto' (「昆虫」) は, 「蚕」以外のものではなく, したがって, 'il glutine di un insetto' は, 丁寧に言えば, 「蚕が引く繭糸の膠質」の意であるから, „die Abscheidung eines Insekts“ (「昆虫の出す分泌物」) とすべきではなく, „das Glutin des Seidenraupen-gespinnstes“ と訳すべきである。

サ) 単に „Seide“ (「絹布」) であるべきではなく, „Seidensamt“ (「絹ピロード」) とすべき。

26) エピクウロオスが自らの「主要原理」を「開示」した, とされる (門下にして・『エピクウロオスの青年時代』の筆者) ヘーロドオトオス (Ἡρόδοτος) 宛て書簡・『エピクウロオス, ヘーロドオトオスに挨拶をおくる』 (“Ἐπικούρος Ἡροδοτῷ χαίρειν”. 通称・『第一書簡』) は, 「五十四」, (「第 16 パラグラフ」) で, つぎのように述べている。

「言うまでもなく, 原子 (αἰῶτοιμοι [ハイ・アトモイ]) は, 形態 (σχῆμα [スクヘーエマ]) と重量 (βάρος [バロス]) と体積 (μεγέθη [メゲエトヘー]), および, 形態に必然に付随している・一切の性質以外には, 外部感覚器官に現われるものがもつ性質 (ποιότης [ポイオテエス]) を, なに一つ, 示すものではない, と考えなくてはならない。なぜなら, かかる性質は, ことごとく, 生成・消滅するものであるが, これにひきかえ, 原子は, 断じて, 生成・消滅することがないからであって, その理由は, [原子から] 合成された実体 (συγκρίσεις [シユンクリイセイス]) が崩壊する間にも, 揺るぎなき・崩れ去らざる・あるものが, 基層に存続しているのでなくてはならないのであって, すなわち, 非存在への消滅も, 非存在からの生成も, 考えることはできず, 考えられうるのは, 交替 (μεταθέσεις [メタアトヘエシス]) による・あるもの [原子] の転入と転出とであり, このところから, 交替するもの [原子] は, 必ず (ἀναγκαῖον [アナアンカァイオン]), 減びることのないものでなくてはならないし, すなわち, 生成・消滅するものがそなえている自然本性をもたないものでなくてはならず, しかし, 微粒子 (ὄγκοι¹⁾ [オンコイ]) と, 自らに固有の配列 (σχηματισμοί²⁾ [スクヘーエマティスモイ]) とを, もつものでなくてはならない, というところにある。必ず, 基層に存続していなければならないのは, [原子のもつ・この・微粒子と, 固有の配列と, である]。 (“Epicurus. The extant remains. With short critical apparatus, translations and notes by Cyril Bailey.” Oxford, The Clarendon Press, 1926.1-432 p. pp. 30-32 ; “Epicvrea. Edidit Hermannvs Vsener. [Usener]” Lipsiae, Aedibvs B. G. Tevbner. 1887. -

LXXXVIII, 1–445 p. pp. 14–15)

1) ‘ὄγκοι’ (pl. ; sg. ‘ὄγκος’)・「微粒子」とは、『第一書簡』・後出・「五十九」(「第18パラグラフ」)に、

「…また、私は、原子が体積をもつことを、体積の大なる原子を割ってみると、体積の小なるもの以外にない、という順序で、断定した。してみると、さらに、極小の (ἐλάχιστα [エラァクヒイスタァ])・幾何学の点にあたる (ἀμιγῆ [アミイゲエーエ]) 極点 (πέρατα [ペエラァタァ]。pl. ; sg. πέρασ [ペエラァス]。τὰ ἐλάχιστα καὶ ἀμιγῆ πέρατα。pl.) をも、考えなくてはならなくなるが、この極点は、自らを第一の起点として、より小なもの、より大なものに、長さの単位を用意するものであって、…」と述べられている「極点」を、指す。(Bailey, p. 34 ; Usener, p. 17)

2) ‘σχηματισμοί’ (pl. ; sg. ‘σχηματισμός’)。 「四十二」(「第7パラグラフ」)には、‘σχήμασις’ ([スクヘエーマアスィス]) の語形で現われている。(Bailey, p. 24 ; Usener, p. 7)

両語とも、もとより、‘σχῆμα’ ([スクヘエーエマァ]。 「態様」, 「形態」, 「位置」, 「姿勢」, 等) からの「導出動詞」・‘σχηματίξεν’ ([スクヘエーマァティゼイン]。 「態様・形態」, 等を、とる)、「…を、与える」 「形づくる」, 「配列する」, 等) に由来する「名詞」である。

アリイストオテエレーースは、『自然研究講義』・「第一」中で、「動詞」・‘σχηματίξεν’ を、三度、使用しているが、その一つの用法に、つぎがある。

「もつとも、万人は、同一のもの [例えば、身体の肉のつき方] に、相反するもの、すなわち、緊まりと弛み、および、緊まり方の強・弱、弛み方の大・小という態様を認める (σχηματίξουσιν) ものである。ところで、疑う余地もなく、明白なのは、前述のとおり、超過と不足とは、かかる態様である、ということである。つぎの所論が、古くから行われているのは、上記に基づく。すなわち、同一のものと、超過と不足とが、存在者の根源にある、と。しかし、この所論も、終始同じではなく、古人は、超過と不足とが、能動であり、同一のものは、受動である、と言い、後代の人、逆に、同一のものが、能動であり、超過と不足とは、むしろ、受動である、と主張した。 (‘Αριστοτέλης : “Φυσικῆς Ἀκροάσις.” A. 6. 189 · b, 8–16. “Physica.” Recōgnōvit … W. D. Ross. Oxford. Typogr. Clarendonianum 1977.)

アリイストオテエレーースは、「同一のもの」を、また、「態様」・「形態」の「基層にあるもの」 (ὑποκείμενον) と名づけ、「存在者」においては、総じて、この「基

層にあるもの」が、必ず、いずれかの・しかし、「相反する」「態様・形態」を「とる」・「まとう」、とするのであり、それが、上掲の・「古くから」の「所論」に、この両者が、「存在者の根源にある」、とされている、と述べた理由である。

しかし、『講義』・「第六」では、つぎのように、用いられている。

「万物は、それが完結する時には、形態をもつもの (*σχηματιζόμενον*) であり・構成されたもの (*ρυθμιζόμενον*) であって、私が完結した物と言うのは、それがなにかから出来ているか・その材質のことでは、なく、すなわち、例えば、青銅製の人物像、ないし、密臘製の尖塔、ないし、木製の寝台を、言うのでは、ない。私は、完結した物を、一方で、それが派生したものの名辞によって、青銅製のもの、また、密臘製のもの、さては、木製のもの、と呼ぶが、しかし、他方では、形づくられたもの (*πεπονθός*)・すなわち、変形せしめられたもの (*ἡλλοιωμένον*) として、そう呼ぶのである」(H. 3. 245・b, 9-13.)

‘*σχηματίξειν*’ の・この語意は、——次・脚注・26・a) に記した—— ‘*μετασχηματίξειν*’, それに由来する ‘*μετασχήμασις*.’ ないし ‘*μετασχηματισμός*’ のそれに、ほとんど、等しい。

なぜなら、既に、『講義』・「第一」で、‘*μετασχήμασις*’ の語は、以下のように、使用されているからである。

「しかしながら、生成したものととは、あるものが、例えば人物像のように、形態の変化 (*μετασχήματις*) によって、生成し、あるものが、例えば成育したもののよう、付加によって、あるものが、例えば石からへエールメューエス神の像が彫り出されるように、除去によって、あるものが、例えば家屋のように、合成によって、あるものが、例えば、それぞれの材質にしたがって、姿が変わるように、総じて、変形 (*ἄλλοιώσις*) によって、生成するのである。だが、このようにして生成したものが、基層にあるものから、かかるものに生成した、ということは、明らかである」。(A. 7. 190・b, 5-9)

ところが、しかし、紀元後・六世紀の哲学者・スイムプリイキオス (*Σίμπλικιος* / *Simplīcius*) が、アリストオテレーエスの諸著作に付した・浩瀚な注解のうち、『『天空について』 [現存セズ] の書への注解』・「第二編」・「第十四」, p. 297・b, 23」の項で、

「…、このところから、アリストオテレーエスが言及するに至ったのは、月は、毎月一回の [太陽との] 配列の上で (*ἐν μὲν τοῖς κατὰ μῆνα σχηματισμοῖς*)、月面に [太陽による] 影が作用しない時には、分缺の全容を得る、ということであっ

た」，としているところから推測されるように，(Simplificius : “In Aristotelem de Caelo Commentaria. [Commentaria in Aristotelem Graeca. VII.] Consilio et auctoritate Academiae Litterarum Regiae Borussicae. Edidit I. L. Heiberg.” Berlin, Typis et Impensis Georgii Reimeri. 1894.—xvi, 1—780 p. p. 547. (244 · b, 30—32)

‘*σχηματισμός*’の語は，既に，アリストテレスの時代に，〈諸天体・相互間の配置・配列〉を，表示していた語と思われ，これを，エピクUROOSが，(「原子」から)「合成された実体」の内部での「原子」の「配列」，ないし，(前出・脚注・26)の)「極点」の「配列」の意に転用したもの，と考えられる。

26 · a) 『第一書簡』は，前掲 (cf. 前出・脚注・26) につづいて，「五十五」で，つぎのようにしたためている。

「[「生成・消滅することが，ない」「原子」が，前記の「形態」，「重量」，その他・外部感覚内容に属する「性質」だけは，これをもつ] 理由はといえば，私たち人間の視界内で，移動によって相互間の配列を変えた諸天体に (*ἐν τοῖς παρ’ ἡμῖν μετασχηματιζόμενοις*)，各々の形態が内在していることは，感覚器官によってとらえられるけれども，これにひきかえ，生成・消滅する物体にあつては，上記の・天体の形態が残存するのとは異なつて，外部感覚内容に属する性質は，物体に内在せず，物体の全体から消失してしまう，というところにある」。(Bailey, p. 32 ; Usener, p. 15)

ここに用いられている‘*μετασχηματιζόμενοι*’ ([メエタスクヘエーマアテイゾメノイ]) は，「動詞」・‘*μετασχηματίζειν*’の「受動相」形 (「(星辰，惑星について) 相互間の配列を変える」の意) の「現在分詞」(「形容詞・用法」) である。

そして，上掲の論述の〈前半〉は，前出・脚注・26) に記した・スイムプリイキオスが言う・アリストテレスの「言及」の内容に，〈一致〉するもの，と見ることが出来る。

すなわち，「月面に [太陽による] 影が作用しない」ように，「太陽」と「月」との「相互間の配列」が，「移動によって」「変動する」ことを，エピクUROOSは，‘*μετασχηματίζεσθαι*’ (「相互間の配列を変える」) という語で，表わしたものとされる。

他方，スイムプリイキオスは，前掲・『「天空について」への注解』・「第三編」・「第七」，p. 305 · b, 28 · の項で，

—— ‘*τὰ στοιχεῖα*’ ([タ・ストオイクヘエーエイア]。 「可分割の物質の組成要素」) の「変様」について，——「アリストテレスは，それには，二つの道がある，

と言う。すなわち、一つは、例えば、同一の蜜臘から、球体と四面体とが、時と仕方とを異にして、塑形される場合のように、形態の変化 (*ἡ μετασχηματίσις* [ヘー・メタアスクヘエーマアティスイス]) によるか、…』という「語形」・「語意」を用い、(p. 636 ; 282・b, 19-21)

さらに、上記を、「単一の基体 [蜜臘] の塑形による形態変化 (*μετασχηματισμός* [メタアスクヘエーマアティスモオス])」の「語形」を用いて換言し、「アリストオテレーヌスは、この・第一の道、…に、反論を加えている」と記している。(p. 636 ; 282・b, 32-33)

上掲の '*μετασχῆματις*'、'*μετασχηματισμός*' の語意が、前出・脚注・26) に記した・アリストオテレーヌス・『自然研究講義』・「第一」(A. 7. 190・b, 5-9) における・それと、〈等しい〉ことは、言うを俟たない。

ベイコンは、エピクウロオスによる・「動詞」・'*μετασχηματίξεσθαι*' の用法(「(星辰、惑星について)相互間の配列を変える」)の中に、前掲の・'*σχηματισμός*'(「原子」・「極点」の「配列」)の概念との関連で、「原子」ないし「極点」が「相互間の配列を変える」の概念を見込み、'*metaschēmátismi*' なる語を用いたもの、と考えられる。

27) Latham, R. E. は、かつて編した "Revised Medieval Latin Word-List from British and Irish sources." (London, 1963) の '*actus*' の項で、'*actus pūrus*' について、その語意を、'*actuality unmixed with potentiality*' とし、〈典拠〉を、c. 1250 年 (Matthew of Paris), 1620 年 (Francis Bacon) と示しているが、その後の・"Dictionary of Medieval Latin from British sources." Fascicule I. (A-B) (Oxford U-P., 1975) では、これらの〈典拠〉を除去し、かつ、語意を、"**4 a** *actuality cōpp. to potentiality. b* (abl.) *actually or currently. c* form (*ἐντελέχεια*)." とし、上記・**a** の〈典拠〉の一つに、Bacon, Roger (1210/14-1294) の "Opus Tertium." 125. 中の・長文の論述を挙げている。

けれども、フランシスが、学問上ほとんど憎悪にも近い感情を抱いたスコホオラア派の最盛期を形づくロジャーと等しい理解を、この語についてもつことは、考えられないのであり、いな、なによりまず、直後の叙述に見られるとおり、フランシスが、「*actus* ないし *mōtus* の法則」と、双方の概念を〈同一〉としていることに基づいて、'*actus*' の語意が規定されるべきであることは、明らかである。

'*actus*' なる「名詞」は、'*agere*' ([*アゲエレ*])。「運動の中に入れる」、「押しやる」。「古代ギリシャ語」・「動詞」・'*ἀγειν*' ([*アゲエイン*]) に由来) の「受動分詞」・'*actum*' ([*アーアクトウム*]) に発し、それゆえ、「古典ラテン語」では、「惹き起こされた運動」

を意味するのであり、「名詞」・‘mōtus’（「運動」）が、‘movêre’（[モウエーエレエ]。「運動の中に入れる」、「運動させる」）に源をもつのと、〈対蹠〉をなす。

しかしながら、「古代ギリシャ語」にあつては、「動詞」・‘κινεῖν’（[キィネエーエイン]）が、（‘movêre’ と等しく）「運動の中に入れる」、「運動させる」を意味するにたいし、「受動相」形・‘κινεῖσθαι’は、—— 本来は、「運動せしめられる」の意でありながら、—— しかし、「名詞」用法にあつては、本来の「名詞」・‘κίνησις’（[キィネエースイス]）と等しく、「運動」を表示したのである。（例えば、Πλάτων：“Σοφιστής.” Stallbaum, I, 250・a—250・b；Burnet, 250・a, 8—250・b, 2）

同じようにして、「古典ラテン語」・「動詞」・‘fêrre’（[フェルレエ]。「運んでいく」、「運動の中に入れる」）の源である・「古代ギリシャ語」・「動詞」・‘φέρειν’（[プヘエレイン]。「運ぶ」）は、「受動相」形・‘φέρεσθαι’において、「運ばれる」、「連れ去られる」のほか、「運動する」の語意をもち（Πλάτων：“Κρατύλος.” Stallbaum, I. 411・c—411・d；Burnet, 411・c, 4—411・d, 6），

そして、「運動する」を表示する‘φέρεσθαι’に由来する「名詞」・‘φορά’（[プホオラァ]）が、プラトーンでも、また、エピクウロオスでも、用いられて、（主として、「宇宙」、「天体」の）「運動」・「運行」を、意味したが、

この‘φορά’を、アリストオテエレエースは、‘κίνησις κατὰ τόπον’（「場所にかかわる運動」）であり・また、「他のものによって惹き起される運動（φορά）」の四つ・「牽引、投擲、運搬、回転」とした。（“Φυσική Ἀκροάσις.” H. 2. 243・a, 35—17）

しかし、プラトーンは、‘φορά’と‘κίνησις’とを、〈同義〉と見ている、と思われ（“Κρατύλος.” Stallbaum, I. 434・c；Burnet, 434・c, 2），

エピクウロオスも、「原子」および「極点」について、「運動」を語るさいに、専ら、‘φορά’の語を用いている。（『第一書簡』・「第19」、「第20」パラグラフ。「六十」—「六十一」。Bailey, p. 36；Usener, S. 18）

さて、上記のようにして、‘φορά’は、「ラテン語」の‘âctus’に〈相当〉するところから、ベイコンは、「運動」（「運行」）を表示するのに、‘âctus’の語を用い、そして、プラトーン、エピクウロオスと等しく、「âctūs ないし mōtus の…」という表現をとったもの、と考えられる。

加えれば、‘pûrus’は、「古代ギリシャ語」の「形容詞」・‘ἀπλός’ / ‘ἀπλοῦς’に相当するものとして、「ひたすらなる」の意と解すべきである。

29) キィクェロオは、自らの・哲学上の体系叙述としては唯一の著作であり、同時代の・最も有力な・倫理学の三体系、すなわち、エピクウロオス派、ストオア派、および、

シリアの・アスカ[・]ア[・]ロ[・]オ[・]ーンのアンテ[・]イ[・]オ[・]ク[・]ホ[・]オ[・]ス王のアカ[・]ア[・]デ[・]エ[・]メ[・]エ[・]イ[・]アのそれを、講解し批判した『よいものとわるいものとの窮極にあるものについて』(“De Fīnibus Bonōrum et Malōrum.” 全・五編)なる対話篇の初めで(「第一編」・「十七」), エピ[・]ク[・]ウ[・]ロ[・]オ[・]スの理論について、

「まず、第一点を申せば」と私は言った、「エピ[・]ク[・]ウ[・]ル[・]ウスは、自分が最も得意とする自然学にあっては、まずなによりも、一から十まで、他人からの借り物屋である、ということですな。彼の語っているところは、デ[・]エ[・]モ[・]オ[・]ク[・]リ[・]ト[・]ウ[・]スの説であり、ほんの少々、目先を変えているにすぎません」と切り出し、

「デ[・]エ[・]モ[・]オ[・]ク[・]リ[・]ト[・]ウ[・]スの見解とは、自ら称するところの原子(átomī [ア[・]ト[・]オ[・]ミ[・]イー]), すなわち、揺るぎなき性質ゆえに分割しえざる物体(corpora individua [コ[・]オ[・]ル[・]ポ[・]オ[・]ラ[・]ア[・]・イン[・]デ[・]イ[・]ウ[・]イ[・]ド[・]ウ[・]ア])が、無限の虚空の中を、つまり、絶頂も、絶下も、中間も、内奥の極致も、外端の極限も、なに一つない虚空の中を運動し、衝突によって互いに合体するのであって、この合体から、存在するものの・すべてと、識別されるものの・ことごとくとが、生みなされるのであり、そしてまた、原子の・こうした運動は、始まりもなく、無限の時から生じきたっている、と考えられる、というものでありました。しかし、デ[・]エ[・]モ[・]オ[・]ク[・]リ[・]ト[・]ウ[・]スを継いだエピ[・]ク[・]ウ[・]ル[・]ウスは、それほどまでの踏み外しは、いたしませんでした。」と述べ、

この両者には、「自分として賛同しえぬ点が、多々ある」が、「とりわけて」、「事物の自然本性にかんしては、探究されるべきは、二つの事柄」であり、「一つには、総じて事物が生み出される質料/物質(mātēria)は、なにであるのか」、「二つには、なにごとをであれ、生み出す力(vis)は、いかなるものであるのか」、であるにも拘らず、両者は、前者・「物質」については、「扱った」ものの、後者・「生み出す力すなわち原因(cāusa)」には、「手をふれなかった」点が、「両者に共通の欠陥」である、とし、

さらに、「エピ[・]ク[・]ウ[・]ル[・]ウス独自の破産」を論じて、その見解は、——「上記の・分割しえざる・揺るぎなき物体は(illa individua et sólida cōrpora)、自らの重量により、垂直に、下方へ運動[/落下]するものであって、これは、あらゆる物体の・自然にしたがう運動である」というところにあった。しかしながら、「あらゆる物体が、下方へ、直線をなし、つまり、垂直に、落下するとすれば、原子(átomus)が、互いに接触し、それゆえ、エピ[・]ク[・]ウ[・]ル[・]ウス自らが捏造した事柄を産み出すことは、断じてありえない、という困難に逢着した時」、「この頭脳明敏なる御人」は、「原子というものは、これ以上僅かということが、ありえないほどに、ごく僅か、偏る運動をする(dēclīnāre)のであり」、「こうして、原子の・相互の絡み合い・結合・癒着が、

生じ、そこから、世界と、いかなるものであれ、世界のうちにある・あらゆる部分とが、生まれる、としたのであった。[しかしながら、]この弁明の内容は、一から十まで、子どもじみた・でっち上げであるから、自らの望むところには、皆目、効果が無いのである、として、以下、「原子」の「落下運動」の「偏り」なる見解の《矛盾》を、衝いている。(The Loeb Classical Library. XVII. Cambridge (Mass.), London, 1971. pp. 18–22)

キケロが、「古典ラテン語」で‘atomus’([アトムウス])と表記している「男性名詞」は、もとより、「古代ギリシャ語」の「形容詞」・‘άτομος’, ‘-ον’ (「分割しえざる」)に由来し、さらに、これは、「動詞」・‘τέμνειν’ ([テムネイン]。「分割する」, 等)に発する「名詞」・‘τόμος’ ([トモオス]。(m)。「断片」, 等)に、「否定」の意を表示する「辞頭語」・‘ἀ’が付されたものであって、

初めは‘άτομος φύσις’ (「分割しえざる自然」)という「女性」語形で用いられ、次第に、「定冠詞」を付した‘ἡ άτομος’のみで「原子」を意味するようになった。

「古典ラテン語」でも、最初, ‘atomos’ / ‘atomus’ (m.) ; ‘atoma’ (f.) ; ‘atomum’ (n.)と「形容詞」として、のちに、「女性名詞」・‘atomus’として、使用された。(ただし、「中性名詞」・‘atomum’は、「瞬時」, 「瞬間」を、表示した)。

この「原子」が、キケロにより、「分割しえざる物体」(cōrpora individua. (pl. ; sg. ‘cōrpus individuum’))と表現されているのは、上掲のほかでは、『神なるものの自然本性について』(“Dē Nātūrā Deōrum.”)の「第一編」・「十七」にあって、であり(The Loeb Classical Library, XIX. Cambridge (Mass.), London, 1989. p. 68), 『アカデミーカ[古・新アカデミーアの教説][別名, ルクullus]』(“Acadēmica. [Lūcullus.]”)・「第二編」・「五十五」・「第十七章」では, ‘individua’, (The Loeb Classical Library. XIX. Cambridge (Mass.), London, 1989. p. 538), 『運命について』(“Dē Fātō.”)・「二十五」・「第十章」でも, ‘individua’ (The Loeb Classical Library. IV. Cambridge (Mass.), London, 1982. p. 220)の語によって、「原子」が、表わされている。(‘individua cōrpora’ (「分割しえざる物体」)の略記)。

また、キケロが、デモクリトウスとエピクurlusとの所論にかかわって, ‘atomus’の語を用いているのは、上掲のとおり, 『よいものとわるいものとの窮極にあるものについて』・「第一編」・「十七」, (p. 18)のほか, 『神なるものの自然本性について』・「五十四」, 「第一章」, (p. 54) ; 「運命について」・「二十二」・「第十章」, (p. 216), 「二十三」・同・「第十章」, (p. 218)にあって、である。